
全てを白紙に

桔梗ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全てを白紙に

【Nコード】

N0103W

【作者名】

桔梗ゆき

【あらすじ】

全ての物体を消そうとする軍団から世界を救うため、水を操れる少女・レンとその仲間たちは立ち上がった！ 旅を進めていくうちに、隠されていた秘密は明らかになる――。世界は元のように色を取り戻せるのか？

民の行列

色界では、ある計画が進められていた。全てを消す計画が。

全ての物体を消そうとする軍団・無色白団ラカノグライトが自分の町へ近づいていることを、レンは聞いたことがあった。そして、無色白団ラカノグライトが、レンの住む町・キャルにも襲ってきた。

一学期の終業式後、帰り道でレンが見たのは、無色白団ラカノグライトを倒すために町から旅立つ人々だった。荷物を背負い、険しそうな顔をする人や、共に旅をする仲間と話す人など、大勢の人が道の中心で列を作っていた。そんな人々を、レンは脇でじっと眺めていた。

レンの両親も、三日前から無色白団ラカノグライトを倒す旅に出ていた。レンの両親は、民の中でも強いと評判だったが、それがわかっていても、レンは何かあったらと不安になっていた。

「すごい人ですね、レンちゃん」

隣にいた親友のリルの声に、レンははっとした。

「いろんな民の人が行くんですね」

「う、うん、そうだね」

行列にいる人々は様々な色の髪や目をしていた。

色界の人々は、それぞれ異なる能力を持ち、色によってその能力が決められていた。腰まで伸びた空色の髪に青い目をしたレンは、水や氷を操る青の民ブルシアであり、緑色の髪を肩まで伸ばし、黄緑色の目をしたリルは、草や花を操る緑の民ブルリグと呼ばれている。

「どうしました？ レンちゃん」

「え？」

「話しかけた時、慌てた感じで答えてましたよね」

「そうだった？ ううん、なんでもないよ」

「ふうん……」

その時、たつたと走ってくる音がした。

「あ、カオンちゃんが来ましたよ」

カオンは息をきらして、二人に尋ねた。

「二人とも、何を見ているんだ？」

「走ってる時に見えなかった？ ラカノグレイト 無色白団を倒す人の行列だよ」

レンは行列を指差した。

「いや、夢中で前しかみえなかったよ。なるほどね。全く、慌てなくても誰かが倒してくれるって」

カオンは汗をぬぐい、あきれながら行列を見つめていた。

黄色い髪に赤い目をしているカオンは、格闘系の技を使うブルレオの民だ。

三人は同じ中学校に通う二年生で、幼いころから仲がよかった。

「レンちゃん、カオンちゃん、リル達も行かなければいけないのでしょうか……」

リルが不安そうな声に、小さな声で尋ねてきた。

「皆が行くからって、私達も行かなきゃならないということはないと思うよ」

長い行列を見ながら、レンは静かに答えた。

「そうだよ。 皆が人のするままに流されているんだよ」

カオンも、レンの言葉に続けた。

「よかった……。リル、戦うのは怖くて……」

リルは安堵の息をついて微笑んだ。

「さ、こんな長い行列をずっと見てないで、もう帰らないと」

カオンは二人と行列の間をすり抜け、そのまま走って行った。

「あっ、カオン。待って！」

「置いていかないで下さいよ、もう……」

先に行くカオンを、レンとリルは慌てて追いかけた。

翌朝、部屋のカーテンを開けて、レンは驚愕した。昨日まで窓の外に見えていた景色——家の前にあった木や家など——が、巨大な穴が空いたように消えていたからだ。

ラカノゲルイト
(無色白団……！)

レンはカーテンを握りしめた。ついに無色白団ラカノゲルイトが来たのだ。レンはあることを考えた。

(お父さんとお母さんは大丈夫かな……)

レンの胸に、今までずっと抱えていた不安がこみ上げてきた。同時に、昨日見た行列を思い出した。

(私だってできる……きつと……)

レンは心を決めた。

決意（前書き）

この話の中に「漫画」「ゲーム」といった言葉が出てきますが、そういうものがある世界なのでご了承ください。この小説の世界は、私たちの世界とあまり変わりません。

決意

「えっ、本当に？」

「無茶ですよ、レンちゃん」

話を聞いたカオンとリルは驚いていた。

窓からの景色に驚愕した日の午後、レンは家の近くにある公園に二人を呼んだ。そして、今朝決めたことを話したのだった。

「でもどうしたの、レン。ラカノグライト急に無色白団を倒すなんて言うって」

レンの決意、それは無色白団ラカノグライトを倒すことだった。

「今朝考えたんだけど……」

レンは、今朝のことから両親のことを不安に思っていることまですべてを話した。話し終わると、カオンがため息をついた。

「そんなに心配しなくてもいいんじゃないの？ レンのお父さんとお母さんって、すごく強いんでしょ？」

「うん。でも、ずっと戦いなんてなかったし、大丈夫かな……」

「大丈夫だよ。……よし、わかった！」

カオンは話を聞くと、目を輝かせた。

「行こうよ！」

「えっ？」

「無色白団ラカノグライトを倒すの！ 皆で！」

急な提案に、レンとリルは言葉を失ってしまった。

「だって、かっこいいじゃん！ 無色白団ラカノグライトって、色界全体を襲って

いるんでしょ？ そんな人々を倒すなんて、漫画とかゲームみたいでかっこいいよ！ うち、こういうこと、ずっとやってみたかったんだよ！」

はしゃぐカオンを、レンとリルは呆然と見ていた。

「だから行こうよ、三人で！」

「三人って……リルも？」

「当たり前だよ！」

リルは顔を曇らせた。

「ちょっと考えさせてください」

その後、リルはしばらく考え込んだ。リルが何かを決めるときに考え込むことはよくあることだったので、レンとカオンはリルをそっと見守っていた。

「まともりました。聞いてください」

考えがまとまると、リルは自分の考えを話し始めた。

「なんか、変われそうな気がするんです。リル、自信とか勇気とかなくて、思い切って行動できなくて、優柔不断で、迷惑ばかりかけています。でも、旅に出ることで、そんな自分が変われそうなんです。自立できそうなんです！」

レンとカオンは顔を見合わせた。リルの言葉はたどたどしかったが、思いはしっかりと伝わった。リルが自分の思いをはっきりと伝えたのは、これが初めてだった。

「リル、本当に大丈夫？」

じっとこちらを見るリルに、レンは尋ねた。

「はい。リル、できると思いま……いや、できます！」

リルは力強く返事をした。

「よし、二人ともいいの？」

レンの言葉に、リルもカオンも大きくうなずいた。

「じゃあ準備とかがあるから、明後日の午後一時に、この公園に集合ね」

「わかりました！」

「了解！」

「ところでレンちゃん、質問があるんですが……」

「何？」

リルは恥ずかしそうに尋ねた。

「えっと、何をしに行くんですたっけ、レンちゃん」

三人しかいない昼の公園が、沈黙に包まれた。リルは大事なことを忘れていたのだ。

ラカノグレイト
「無色白団倒し」

「あ、そうでした……」

リルは顔を赤くしながらうつむいた。

「大事なことだから、忘れないでよ、リル」

「はい、覚えておきます。じゃあ明後日に！」

リルは顔を赤くしたまま走り去っていった。

「かわいいなあ、リルは」

カオンが笑いながらリルを見ていた。そんな二人の友を、レンは心強そうに見つめていた。

その夜、草原にある古城の一室では、ラカノグレイト無色白団の会議が行われていた。

「明日から本格的に指導する。用意はいいか」

男の言葉に、部屋の中にいる全員がうなずいた。

「我々の目的はただ一つ……わかっているな？」

誰も答えず、部屋の中は沈黙に包まれた。部屋を照らすわずかなろうそくが、ジツと音を立てた。

「誰もわからないのか！」

男の怒号が、部屋の中に響き渡った。

「わかっています」

一人の女が、そっと手を挙げた。

「そうか、何だ？」

女は立ち上がり、ルワラカ男の目を見て言った。

「我々の目的は、ルワラカ色界の物を消し去り、白の世界とすること。そしてその世界から、再び新たな世界を創造することです。全てを白紙に戻し、この汚らしい世界を新しくすることです」

「よく言った。座ってよい」

女は古い木の椅子に座った。

「副団長の言った通りだ。この目的のもとに、我々は行動する。よいか、我々が世界を変えるのだ！ 全てを消し去るのだ！」

歓声が上がる中を、男は立ち去った。男が去ると、ほかの団員も次々に部屋を出た。

誰もいない部屋で、副団長である女は一人つぶやいた。

「ルノ様、われらが団長……。何としてでもお守りいたします……」
女は男の座っていた席を見ると、静かに立ち去った。

決意（後書き）

母はこの話を読んで、「成長物語みたいでいい」と言ってくれました。しかし、本当に成長できるのか……。

レン

「成長させてください！」

わかりました！

リル

「絶対ですよ！」

わかったから落ち着いてよ、二人とも……。

白砲

公園で約束をした日の二日後、レンはその公園でブランコに座りながら、リルとカオンを待っていた。

「レーナー、来たよー」

カオンは約束の時間丁度に公園に来た。

「さて、例の人はまた遅刻だね」

カオンが公園の時計を見ながら言った。例の人というのは、約束を了承しながらも、まだ来ていない友、リルのことだった。リルは遅刻気味で、いつもレンやカオンを待たせている。

「待っているときに遊べるのがいいんだよね、公園って」

そう言いながら、カオンは滑り台へ走った。

「公園で遊ぶ中学生なんて、あまり見かけないけどね……」

「そういうレンも遊んでいるじゃん」

レンは手をぐっと握りしめてうなずいた。実際は座っているだけなのだが。

カオンは何回か滑り台を滑り終えたと、レンのいるブランコへ向かってきた。そして座る部分に立ったまま、ブランコを漕ぎ始めた。レンも後に続いてブランコに立った。座った時よりも視線が高い。幼い頃は高いのが怖くて、なかなか立つことができなかった。カオンに支えられて初めて立てたときは、その風景に感動したのを覚えてる。

「また遊んでいるんですか？」

物思いにふけていると、入口の方から聞き覚えのある声がし、レンはその方向を向いた。

「ごめんなさい！ また遅刻です……」

頭を下げ、手を合わせたリルが、そこには立っていた。カオンが来てから、五分後のことだった。

「よし、全員そろったね」

ブランコを降り、レンとカオンは入口へ向かった。

「で、レン。これからどうするの？」

「……………」

「まさか、考えていないなんて、言わないよね？」

「……………」

何も考えていなかった。

「どうします？」

「どうするの？」

二人の友に問われ、レンはすぐに答えられず、少し考えてからこう言った。

「えっと、無色白団の本拠地に行こうかと思っているんだ」

それは、咄嗟に出た答えだった。

「その本拠地はどこにあるの？」

「ああ、それがわからなくて。だから行列にいる人に話を聞こうと思ってる」

「今からですか？」

「今から！」

話しながら、レンは不安を感じていた。向かう場所は敵の本拠地。手ごわい敵もいて、激しい戦いになるだろう。その戦いの中に、自分たちは身を投じるのだ。

「へえ、レンもすごいこと考えるねえ」

カオンが腕組みをし、にやりと笑っていた。

「じゃあ、いつもの学校への道へ行こうか」

三人は行列を目指し、歩き始めた。

通学路に行くと、予想通り、無色白団を倒す人々の行列が並んでいた。休日ということもあり、前に見た時よりも並ぶ人が多いように感じられた。

早速、前にいる男性に場所を聞くと、

「さあね、知らんよ」

と、そっけなく返された。

次に、カオンが後ろの男性に場所を聞くと、

「本拠地に行くわけじゃないから、わからないな」と、申し訳なさそうに答えられた。

「じゃあ、何をしに？」

「色界中ルツラカにいる無色白団シヨイトを追い払うのさ。ところで君、旅に出るのなら、白砲シヨイトには気をつけろよ」

「白砲？ それは一体？」

男性とカオンのやり取りを聞くため、レンは行列を抜け、カオンの隣に移動した。

「白砲シヨイトを知らないのかい？ 白砲シヨイトは無色白団ラカノグルイトの武器だよ。持ち歩ける小型のものから、大砲型のものもある。白砲シヨイトの弾に少しでも触れたら、そのものは跡形もなく消えてしまう。無色白団ラカノグルイトはそうやって、人や物を消しているんだ」

「ええ……。怖いです」

カオンの後ろで聞いていたリルは、少し後ずさった。

「君たちは無色白団ラカノグルイトの本拠地へ行くのかい？」

「うん」

「『はい』だよ、カオン」

「それなら、この列とは別の列に並ぶんだよ」

「え……」

行列は一つだけではなかったらしい。三人は列が進んでいるのも忘れて、立ち尽くしてしまった。

「ほら、進んで」

男性に言われて、三人はゆっくりと歩きだした。

「その行列の場所は？」

「いや、それはわからない」

「そうですか。困ったな」

レンは歩きながら周りを見た。行列らしきものは見当たらない。「じゃあ、その行列を探しますか……」

真実を知ったレンが行列から抜けようとした時だった。

「無色白団ラカノグルイトが来たぞー！」

列の後ろから、誰かが叫ぶ声が聞こえた。はっとして列の外を見ると、銃のようなものを構えた人々がこちらを睨みつけていた。あれが無色白団ラカノグルイト、あれが白砲シヨイトなのだろうか……。

「白砲シヨイトには気をつけろよ……。消されたらどうしようもない」

一人の団員が白砲シヨイトを下ろし、ほかの団員も次々に下ろしていき、立ち去ろうとした。行列の人々は落ち着き、騒がしくなり始めた。その時、後ろ側から一発の銃声が響いた。

「何？」

レンが音のした方を向くと、団員の持つ白砲シヨイトから、白いものが出ていたのが見えた。

「レンちゃん、あれ、！」

リルが指差した方向を見ると、白砲シヨイトを下ろしていた団員が、再び白砲シヨイトを構えていた。その瞬間、あちらこちらから銃声と悲鳴が聞こえた。そして、白砲シヨイトが三人にも向けられた。レンとリルは動けず、団員を見ることができなかった。白砲シヨイトから白いものが出てきた——と思うと、レンは何かを押されるのを感じた。隣にはリルがいるが、カオンはいない。押された方を見ると、カオンがレンをじっと見ていた。

「カオン？」

「ごめん、二人とも。うちは……」

言葉が途切れ、カオンは白いものに包まれた。おもわずリルの手を握り、目を閉じた。目を開けると、そこにカオンの姿はなかった。後ろを見ると、白砲シヨイトのことを教えてくれたあの男性の姿もなかった。「おい、何もたまたしてるんだ！」

声ができる方を振り向くと、質問にそっけなく答えた男性がいた。

「奴はまた襲ってくるぞ！ 早く逃げろ！」

レンはうなずき、泣き出しそうなリルの手を握ったまま、行列を抜けて走り出した。何発もの銃声が、頭から離れなかった。

魔色筆

無我夢中で走り続け、気が付くと、レンはリルの手をつかんだまま森の中にいた。

（何があっただけ……。ああ、そうか。行列から抜け出して……）

レンは辺りを見回し、カオンがいないことに気付いた。

「カオン、カオンは？」

「レンちゃん、えっと……」

リルがうつむいていた顔を上げて言った。

「カオンちゃん、消えちゃったんですよ」

リルの顔には、うつすらと涙の跡がついていた。

「え？」

「カオンちゃん、白砲シュイトの弾に当たって消えちゃったんですよ！ 無色ラカノ白団グルイトに消されたんです！」

リルの目から、涙が溢れ始めた。

「カオンちゃん、リルたちをかばって、弾に当たってしまったんです」

「ちょっと待ってよ！」

レンはリルの話をさえぎり、今までのことを思い出した。あの行列で、確かにカオンは自分たちを押し、自らを犠牲にした――。

「何で……。なんでカオンが消えるのよ！」

「だから、カオンちゃんがかばったからで……」

「自分を守ろうとはしなかったの？」

「それは……」

「リル！」

「その子の言うとおりで」

突然、後ろから声がした。振り向くと、黒髪に緑色の目をし、豎琴を持っている男性がいた。男性は持っている豎琴の絃を鳴らし、

レンを見ていた。

「あなたは……?」

「俺はヤイラ。魔色筆ジマラカシラを探している」

「ジマ……え?」

「魔色筆だ」

ヤイラという男性は、レンに歩み寄ってきた。

「話は聞いた。カオンっていう子が、消されたんだろ?」

「どこで聞いた……んですか?」

「ああ、無理しなくてもいいから。歩いているときに聞こえていたカオンっていうのは、友達か?」

「はい。幼い頃から、大の仲良しで……」

レンはヤイラに、カオンのことや、森にいる理由を話した。

「そうか、大変だったな。しかし、カオンは消えてしまった。いなくなってしまった。もし彼女が押していなかったら、お前たちはここにはいなかった。カオンは、どうしても助けたかったんだ、大切な友達を。たとえば自分が消えてしまっても、お前たちを助けたかったのだろう」

ヤイラはレンの肩に手を置き、優しい声で言った。

「だが、あきらめてはいけない。カオンは、また戻ってくる。魔色筆シラを使えばな」

「ライヤさん、そのジマ何とかって何ですか?」

「ライヤじゃない、ヤイラだ。ジマ何とかっていうのは、『ジマラカシラ』と言う」

「すみません、ヤイラさん」

名前を間違えてしまい、リルは恥ずかしくてうつむいてしまった。

「魔色筆は、白砲で消えたものを元に戻す筆だ。しかもそれで戻ったものは、二度と消えることはない」

「本当ですか?」

リルは顔を上げ、目を輝かせた。

「私も探したいです」

「リル？」

レンは驚き、リルを見た。

「魔色筆ジマラカシラがあれば、カオンちゃんも戻ってくるんですよ？」

「ああ」

リルの顔が、ぱっと明るくなった。

「探します！ 魔色筆ジマラカシラを使ってカオンちゃんを、消えてしまったものを元に戻したいです！」

「よし、わかった。行きたいか？」

「はい！ レンちゃんはどうします？」

「私は、いいよ」

「え？」

「私は、無色白団ラカノグルイトを倒すために旅に出たんだから、その目的を成し遂げたいの」

「あ、わかりました」

「本当にいいのか？」

「はい」

どうしても、無色白団ラカノグルイトを倒す目的は変えられなかった。別れの寂しさもある。しかし今は、また会うことを約束して、先へ進んでいこう。そう心に決め、森の中にある分かれ道へ着いた。

「そういえば、お前たちはちゃんと名乗っていなかったな」

「あ……。私は青の民ブルシアのレンです」

「緑の民ブルリグのリルです。よろしくお願いします」

「レンは無色白団ラカノグルイトを倒すんだな？」

「はい」

ヤイラは地図を取り出し、レンに見せた。

「南東の草原に、彼らの拠点とする城があるから、そこへ行けばいい。一人で大丈夫なのか？」

「大丈夫です」

「じゃあ、気をつけろよ、レン」

「また会いましょうね」

レンは二人と反対の道を進みかけたが、立ち止まってヤイラを見た。

「ヤイラさん、あなたは何の民ですか？」

ヤイラはレンを見、薄笑いをしていった。

「緑の民だ……」

そして前を向き、先を進んでいった。やがてレンも、道を歩き始めた。

「でも私、本当に一人で大丈夫かな？」

自信を持っていたが、急に不安になってきた。それでも、レンは森の中を歩いて行った。振り返っても、そこに親友の姿はなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0103w/>

全てを白紙に

2011年11月7日03時27分発行